

地域に寄り添うシェアサイクルで 「わくわく感」を提供したい



シナネンホールディングスグループ

シナネンホールディングス株式会社
ミライフ株式会社
シナネン株式会社
シナネンサイクル株式会社

シナネンホールディングス株式会社
シナネンエージェンシー株式会社
タカラビルメンテナンス株式会社

三橋 美和

シナネンモビリティ+
代表取締役社長

森井 博

『自転車・バイク・自動車駐車場 パーキングプレス』誌 発行人

【プロフィール】

三橋 美和 (みつはし みわ)

1973年生まれ 鶴見大学文学部卒業後、1996年に品川燃料株式会社入社、ガス直販部直販課に配属。2003年以降はシナネン株式会社営業本部で営業統括、事業推進、2012年からは管理本部で財務経理、管理業務等の各部署で活躍。2017年4月、シナネンホールディングス株式会社人事部人事戦略チーム長兼人事管理チーム課長。2019年4月にシナネンモビリティ+株式会社代表取締役社長に就任。座右の銘は江戸時代中期、巨額の赤字に苦しんでいた米沢藩の財政を立て直した上杉鷹山の「為せば成る、為さねば成らぬ何事も、成らぬは人の為さぬなりけり」

2018年前後から、民間企業が次々に参入し、シェアサイクル市場は活況を呈した。しかしその後は撤退、縮小など淘汰も進み、しっかりとした経済的バックグラウンドと、明確なビジョンを持つ企業に絞られてきた印象がある。

今回対談させていただいた三橋美和氏率いるシナネンモビリティ+ (PLUS) は、シェアサイクル市場で確かな存在感を放つ事業者のひとつだ。会社設立は2019年4月と一年未満だが、ソフトバンクグループのオープンストリート株式会社が運営するシェアサイクリングサービス「HELLO CYCLING」と提携。首都圏を中心にオリジナルブランド「ダイチャリ」を運営しており、着実にサービス網を拡大している。

ラストワンマイルの移動手段として公共交通機関と接続し、既存交通が入りにくいエリアの足となり、認知度を高めるシェアサイクル。シナネンモビリティ+は、この状況をどのようにとらえ、いかに切り開こうとしているのだろうか。

(対談収録：2019年12月24日)

発行人との意外な縁とエネルギー業界への想い

三橋 対談に臨む前に、バックナンバーに載っていた会長の経歴を拝見したところ、私の母と森井会長に深い縁

があることが分かり、とても驚きました。母も会長が卒業された石川県金沢市の金沢泉丘高校の卒業生だったんです。母は昭和24年生まれで会長の後輩にあたります。

森井 それは奇遇ですね。お母様は金沢出身なのですか。

三橋 はい、父と母は金沢大学で知り合い、その後結婚して私が生まれました。ただ、父は転勤族でしたので、私は北陸には10年くらいしか住んでいなかったのですが。

森井 そうですか。親が転勤族という点は、私と三橋社長は共通していますね。私の父は旭化成に勤めていました、金沢には私が中学、高校の時に住んでいました。では、意外なご縁が明らかになったところで本題に参りましょうか。三橋社長がシナネンモビリティ+の社長に就任された直後には、弊誌でインタビュー記事をつくらせていただきました(注：2019年5月号掲載)。その記事ではお尋ねしていなかったのですが、三橋社長がシナネンホールディングスグループを志した理由を教えてくださいませんか。

三橋 父から受けた影響がきっかけになりました。父は伊藤忠商事でエネルギー関連の仕事をしており、私が幼少の頃からエネルギーに関する話を聞くことが多かったんですね。言うまでもありませんが、エネルギーは、産業はもちろん、

私たちの生活にとって不可欠の存在です。さらに私が生まれた年に発生したオイル・ショックについて書かれた書物などを後年読んだ際も、エネルギーの重要性を実感しました。

森井 オイル・ショックといえば真っ先に思い出すのが、堺屋太一さんが著された『油断!』ですね。中東からの石油輸入に依存していた我が国に、もし石油が届かなくなったらどんな事態に陥るのか。予想される未曾有の状況を描いたシミュレーション小説でした。オイル・ショックが起きるまで順調に成長してきた日本経済が初めて直面する危機を描いた名著でしたね。

三橋 私が読んだのはまさにその本です! エネルギーの大半を石油に依存していたことのリスクと同時に、情報に踊らされず真実を見極めることの大切さを学びました。そうした体験が、私がエネルギー業界を志す原動力になったんです。

森井 シナネンさんというと、前身の「品川燃料」が製造していた練炭を思い出しますね。昭和40年代前半までは家庭で暖を取るといえば、練炭と掘りごたつが一般的でしたから。

三橋 はい。当時、弊社では「品川いっぽつ練炭」「品川いっぽつ豆炭」などがヒットしておりまして、多くのご家庭でお使いいただいております。現在でもグループのコア事業は変わらずエネルギーであり、LPガス、都市ガス、



① シナネンホールディングスグループの基幹となる石油・ガス事業。全国各地のエネルギー基地を活用し、法人顧客を対象に石油製品の販売を展開



② 1968年12月に発売された大ヒット商品「品川いっぽつ豆炭」

③ グループの一角を成すシナネンサイクル株式会社の自転車チェーン店「ダイシャリン」。関東～東北で40店舗を展開(2019.12現在)する半世紀超年の歴史をもつ老舗自転車店だ





石油、太陽光発電、電気など多様化しています。また、エネルギーソリューション事業、海外展開なども積極的に展開しています。

森井 非エネルギー領域にも多くのグループ企業がありますね。

三橋 はい。抗菌事業、環境リサイクル、また、ライフサイクルコストの多くの部分を担おうと建物維持管理事業も展開しております。その領域のなかにシナネンサイクルがございまして、50年近くにわたって自転車の開発、輸入、卸売、小売などをさせていただいておりました。シェアサイクル事業は、当初、シナネン

サイクルの新規事業として立ち上げたのですが、2019年4月にシェアサイクル事業に特化した企業として分社化し、今に至っております。

コンビニ大手三社との連携で ダイチャリのネットワークを拡張

森井 そして初代社長に就任されたのが三橋さんというわけですね。それからおよそ9か月近くが経過しましたが、ここまでの手ごたえはいかがですか。

三橋 おかげさまで順調に推移しております。2019年12月末時点の調査では、HELLO CYCLINGは19都道府県、2,587ステーションでシェアサイクルを展開しています。そのなかで弊社・シナネンモビリティ+の「ダイチャリ」が運営を担っているのは1,230ステーションで、自転車台数は5,303台。HELLO CYCLINGのステーションシェアの半分近くを占め、No.1となっています。自転車台数では後れをとっていますが、ステーション数の1,230という数字では、ドコモさんと双璧をなしていると認識しています。

森井 ステーション数はユーザーの利便性向上に比例しますからね。御社の優位

性を物語る数値だと思います。

三橋 ありがとうございます。弊社がこれだけ多くのステーションを確保できている背景にあるのが、コンビニ大手三社様との提携です。現状では、セブンイレブン様が約600、ファミリーマート様が約200、ローソン様が約50。今後、弊社の強みを活かし、さらにこの数値を伸ばしていきたいと考えています。

森井 東京は23区内外でステーションが339カ所とのことですが、都心部はドコモさん、その周辺が御社という分布になりますか。

三橋 おっしゃるとおりです。ステーション数は多いのですが、お客様の利便性を考えますと、ステーションはまだ不足しているというのが私の認識です。そこでコンビニ様だけでは足りない領域は、弊社のエリア担当営業が地主様にアタックして駅前や商店街近くでのステーション用地確保に努めています。また、首都圏以外のステーション展開は、大阪100カ所、福岡63カ所と、関西～西日本エリアがまだ弱いため、そちらにも注力していこうと考えています。



ステーションはちょっとした空きスペースや狭小地でも開設できる。
①は主要設置場所のひとつコンビニの例 ②ステーションに設置される看板のデザイン。自立式のA看板で視認性も高い ③駐輪ラックはアンカー止め不要で複雑な工事も要らない。耐風圧試験もクリアしている



ステーションを展開している埼玉県和光市が市の広報誌「わこう」(2019年9月号)にて、ダイチャリを活用したまち巡りを提案

森井「地域課題に応じたシェアサイクルを展開し、解決に寄与する」という理念も素晴らしいですね。

三橋 ありがとうございます。弊社では、全国の各地域が抱える課題のソリューションとしてシェアサイクルを活用していただきたい、という思いで事業を展開しています。柱は4つありまして、まずは「商業・観光振興」です。国内外の買い物・観光客などの足としてお使いいただき、にぎわい創出、名所・観光スポットへの回遊性向上を支援致します。二番目が「環境対策」です。ご存知のとおり自転車は大気汚染や騒音、CO₂排出を抑制する移動手段であり、シェアサイクル事業を進めることが環境保護に直結します。三番目は、特に都市部に多く見られる課題の「交通対策」です。シェアサイクルを活用いただくことで、交通混雑、渋滞緩和、近距離移動の時間短縮、さらには、災害発生時のラストワンマイル交通としても機能することに期待できます。そして最後の四番目が「健康・子育て」です。高齢者の外出を支援すると同時に健康維持にも役立てていただく、さらに子育て世代の外出支援も促せると考えています。

シェアサイクルを活用して 地域の魅力を再発見してほしい

森井 私の印象ではドコモさんは比較的自治体さんと多く組んで、主に公設のシェアサイクルを展開されていますが、御社はコンビニをはじめとする民間企業との連携が中心となっているのでしょうか。

三橋 そうですね。ただ、駅前となるとどうしても民間の用地は不足しがちとなるため、自治体様ともご相談させていただくケースがございます。例えば、埼玉県の和光市様、朝霞市様との協定で、駅前に比較的大きな公用地を提供していただきました。加えて、駅前以外のエリアでも公用地を出していただくのですが、利用者様が自転車を返却したい場所、利用者様の自宅に近い住宅街などに必ずしも公用地が点在しているわけではありません。そうした場所はコンビニ様にステーションを設けるほうが適切なケースもあります。エリア毎に事情が異なりますので、フレキシブルに対応させていただいております。理想としては、自治体の公用地とコンビニなど

民間の土地で同時にステーションを展開し、一気に利用者の視認性を高めていきたいと考えています。

森井 主な利用のシーンというのは、やはり通勤、通学用途でしょうか。

三橋 はい。よく見られるのはコンビニ近くの自宅から歩い



てステーションに向かい、そこから駅に向かう、その往復のパターンです。ただ、帰宅時はまっすぐステーションに向かうのではなく、周遊もされているようですね。また、詳しく調査できておりませんが、おそらく買い物や食事などでどこかに寄り道しているのだろうと想定しております。

森井 そうですね。そのパターンはシェアサイクル利用者によく見られます。

三橋 実は私が弊社HP等でご挨拶で述べているワード「わくわく感」は、この周遊、寄り道から来ています。自転車は歩きに比べれば小回りが利く交通手段。普段はあまり通っていない場所にも好奇心の赴くままに行きやすいですよね。それが新たな発見、ひいてはわくわく感につながるはず、というわけです。そういえば、前述した弊社が提携させていただいている和光市様が発行している広報誌「わこう」の2019年9月号においてダイ



①自転車はYAMAHA製26インチの電動アシスト付き自転車
②駐車場の一角にステーションを設置した例



オフィスビルの一角にステーションを設置した例



こちらは観光地の道の駅に設置したケース

チャリを取り上げていただいたのですが、その趣旨がまさに、ワクワク感に基づいていました。駅と自宅近くの往復だけでなく、ステーションが点在するダイチャリなら和光市内のまち巡りがしやすいですよ、という提案記事だったんです。また、2019年10月14日から栃木県日光市でダイチャリの本格導入を開始しまして、協定式後、実際にシェアサイクルで現地を巡ってみました。有名な観光スポット以外にも雰囲気の良い素敵なお店や小路を見つけることができ、ワクワク感を得ることができました。

自転車活用の推進で モビリティ多様化を予感

森井 自転車の車両の品質、特徴についてはいかがですか。

三橋 まずは全車両が電動アシスト付き自転車であることです。やはり楽に速く移動していただける点で好評ですし、私も坂の多い日光で改めてそのメリットを痛感しました。また、もちろんこまめなメンテナンス、迅速な修理にも配慮を

しております。ステーションを増やして自転車を投下するだけでももちろんだめで、やはり、いつ利用しても不具合がなく、快適に乗っていただけるように準備しておかなければいけません。

森井 自転車のクオリティといえば、思い出すのが数年前に訪ねた信越地方の某市です。そこでは、市が放置自転車を修理して再利用したレンタサイクルと、民間のホテルが運営している某有名ブランドのスポーツタイプのレンタサイクル、2種類が共存していました。料金的には当然公設の方が安く、100円程度。対してホテルのスポーツサイクルは500円程度でした。さて、どちらのほうが回転率が高いかと聞くと、圧倒的にホテルのほうがだったんですね。乗り心地、速さなどもさることながら、乗っているスタイルが様になる自転車は、やはり支持されるのだと実感しました。

三橋 弊社の自転車の9割超はヤマハの電動アシスト付き自転車ですが、湘南エリアではレアなスポーツタイプも展開しています。海沿いでサイクリングロードも整備され、よりスポーティーに自転車を楽しみたいという利用者の声を受けてのものです。

森井 それは良いですね。2020年、さらに増加することが予想されるインバウンドの方々にとっても乗りやすく、評価されるかもしれません。

三橋 はい。インバウンドに関してはおっしゃるとおりで、フランスのセーリング代表チームが東京2020大会を見据えて鎌倉で試合会場の下見を兼ねて合宿をした際、電動アシスト車をお貸したところ、大変好評でした。加えて、ダイチャ

リのパンフレットのHOW TO USEには既に英語、中国語を併記しています。今後もインバウンド対応の拡充を進めていくつもりです。

森井 話は前後しますが、自転車活用推進計画が閣議決定されてから、約1年半が経過しました。以前に比べると事業展開がしやすくなってきたなどの変化を実感されていますか。

三橋 やはり国が旗を振って進めているだけに、各自治体様も自転車走行空間や駐輪場整備などに本腰を入れて取り組むようになってきていると感じます。例えば、車道左側の矢羽のマーク。あれを見る機会が以前に比べると格段に増えました。かつては車中心につくられていた道路が、自転車と走行空間の一部をシェアするように変化しているわけで、近未来のモビリティの多様化を予感させます。

森井 そうですね。走行空間整備もさることながら、利用者に対するマナー、モラルの啓発も進み、自転車先進国への道を着実に歩んでいると思います。

MaaSを見据えて コインパーキングでの ステーション展開を狙え

三橋 ところで、この場をお借りしてひとつおうかがいしたいことがあるのですが、よろしいでしょうか。

森井 はい、何なりと。

三橋 会長が日本パーキングビジネス協会の理事長も務めていらっしゃるということでお聞きしたいのですが、現在のコインパーキングと月極駐車場の割合を大まかに教えていただけませんか。

森井 昭和の高度経済成長期に伴って訪れたモータリゼーションの時代は月極駐車場が大半でした。しかし、バブル経済の崩壊を境に未利用地が増加したことを受け、コインパーキングが増加しました。500㎡以下なら届け出不要ですし、



国際的観光地、日光において、2019年10月14日から東武日光駅～二社一寺間を中心に10ヵ所40台分のステーションを設置し、本格導入を開始した

節税対策にもなるということまで広がったんですね。地域によって差はありますが、現在ではドライバーにとってコインパーキングは身近な存在になっているのは確かだと思います。何故この質問をされたのですか。

三橋 教えていただきありがとうございます。昨今の車離れやカーシェアリングの拡大普及などから、駐車場がどのような状況になっているのかを知りたくてお聞きしました。昨今MaaSが目玉を集めており、近い将来、弊社のシェアサイクルと車の接続性も課題になると考え、駐車場におけるステーション展開は、月極、コインパーキング、どちらが適切なのだろうと思ったのです。

森井 かつて2012年5月号の本欄に登場いただいた勝間和代さんは、最近、荷物の多いときはまず車で目的地近くの、1日最大1,000円といったリーズナブルなコインパーキングに向かい、そこから、徒歩やシェアサイクルなどで動いている



対談は港区三田のシナネンモビリティ+本社が入居する東京港区のオフィスビルで行った。三橋社長の説明は非常に明瞭で熱意があり、新たなビジネスに臨む気概が感じられた。ご自宅に戻れば三人のお子さんをもつ母親でもある

そうです。ほかにもコインパーキングを拠点として動く方は増えていることから、ステーションの展開は、コインパーキングを狙うといいかもしれませんね。

三橋 承知しました。車の後を引き継ぐラストワンマイルとしてのシェアサイ

クルを目指して参ります。

森井 これからのシェアサイクル市場を牽引する有力な事業者として、活躍を期待しております。本日はお忙しいところお時間をいただき、誠にありがとうございました。

PP

【パーキングプレス 発行人】森井 博のプロフィール

- 一般社団法人 日本パーキングビジネス協会 理事長
- 一般社団法人 自転車駐車場工業会 会長
- 一般社団法人 日本シェアサイクル協会 専務理事
- 東京京橋八重洲ライオンズクラブ 会員
- 六本木男声合唱団 団員
- サイカパーキング(株)、日本駐車場救急サービス(株)、モーリスコーポレーション(株) 夫々会長

【略歴】 1938年(昭和13年)宮崎県延岡市生れ81歳。
 1957年(昭和32年)石川県立金沢泉丘高校卒
 1961年(昭和36年)東京商船大学(現東京海洋大学)卒
 1961~1979年 石川島播磨重工業(現: IHI)
 1979~1991年 東芝
 1991年~ 現職

【趣味】 現在: ゴルフ・車・自転車・歌・仕事
 過去: 水泳・野球・陸上競技・テニス

【遍歴】 ゴルフ: 毎週1回ホームコースでラウンド、週1~2回練習場通い。エージシュートは日増しに遠くなりけり。
 車: 毎日通勤で運転。中古車3台を大切に乗り廻す。
 自転車: 数台保有するも年齢を考え余り乗らない。
 歌: 六本木男声合唱団で毎週1回練習に励む。年1~2回サントリーホール等で公演。
 仕事: 健康のため平日は毎日9:00~17:00出勤。
 水泳: 小学校に入る前から泳ぎは得意。
 野球: 中学生までは本気でプロになるつもりであった。
 陸上競技: 高校時代 短距離、やり投げ、インターハイ2回出場。
 テニス: 元テニスクラブのコーチでかなりの腕前(?)になるも、45歳時アキレス腱断裂でプレー断念。

過去の対談ゲストの方は、WEBでご紹介しています

パーキングプレス 対談 で検索

または <http://www.parkingpress.jp/taidan/> にアクセス

対談記事のバックナンバーもご覧いただけます。

